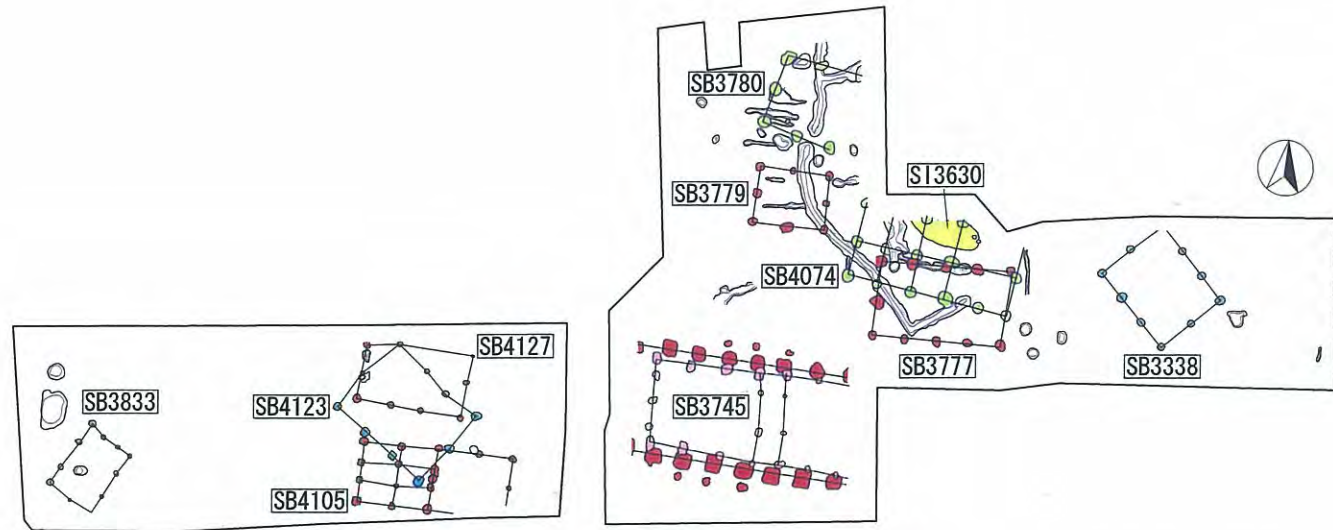


ろくたんだみなみ
糸魚川市六反田南遺跡

平成24年2月11日(土)
(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団



市道1区 平安時代遺構配置図 S=1:500

平安時代の調査

市道1区では、平安時代の掘立柱建物13棟と竪穴建物1棟のほか、土坑や溝などを検出しました。掘立柱建物は建物の桁行(長軸)方向から、3タイプに分けられます。上の図では、A:赤系の柱穴、B:黄色の柱穴、C:水色の柱穴、になります。

Aは、掘立柱建物SB3745・3777・3779・4105・4127が該当します。そのうち、SB3745は桁行7間(約14m)以上の大規模な東西棟です。検出した規模は14m×6m、面積は約84㎡あります。柱穴の規模は、幅が1~1.2mの隅丸方形で、深さは南側が0.6~0.8m、北側が0.3~0.6mとなります。柱穴には柱痕が残っており、その規模から柱の直径は約20cmと推測されます。これらの柱間寸法は約1.8~2mとなっています。柱穴に土や砂を交互に入れて版築状に敲き締めることによって柱をしっかりと支えています。また、建物の内側にも等間隔に並んだ柱穴が見つかっています(桃色の柱穴)。これらの柱穴間隔は東西方向で約2.2~2.4mとなっています。桃色柱穴は、赤色建物の床を張るための床束柱と推測され、赤色柱穴を壊して作られています。これらの柱穴には柱は残っていません。

Bは、掘立柱建物SB3780・4074が該当します。そのうち、SB4074は桁行5間(約11m)・梁行2間(約5m)以上の総柱(1間に格子状に柱を立てた建物)の東西棟です。柱穴の規模は、直径0.6~1mの楕円形、深さは0.4~0.6mあります。柱間寸法は約1.9~2.4mとなっています。建物の北側は調査区外にあり全体の形・規模は分かりませんが、これは倉庫の可能性が考えられます。

Cは、掘立柱建物SB3338・3833・4123が該当します。そのうち、SB3338は桁行3間(約6.3m)・梁行2間(約5m)、面積は約32㎡の側柱建物です。柱穴の規模は、直径0.5~0.7mの楕円形、深さは0.2~0.3mあります。柱間寸法は約2~2.4mとなっています。上記の掘立柱建物以外にも、西側調査区では等間隔に並んだピットを検出しており、何らかの構造物が建っていたことが推測されます。



竪穴建物SI3630遺物出土状況

竪穴建物SI3630は、長径約4.7mの建物で、北側は調査区外にあり全体の形・規模は分かりません。この建物からは須恵器の無台杯、杯蓋、土師器の杯、甕などがまとまって出土しました。食膳具と調理具のセット一式が揃って出土した珍しい例です。器形の特徴から8世紀末頃のものと考えています。

これらの遺構・遺物から、古代頸城郡沼川郷を拠点にしていた在地有力者の館である可能性が考えられます。

はじめに

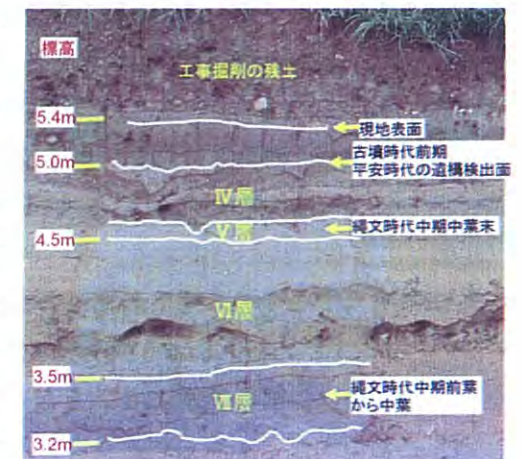
六反田南遺跡は、大和川集落の南、日本海に注ぐ海川の河口右岸に形成された標高約6mの沖積地に位置します。東西420mの範囲に縄文時代中期から始まり、古墳時代、古代、中・近世まで断続的に営まれた延べ4万㎡以上の大きな遺跡です。その中で縄文時代中期前葉から中葉と中期中葉末、古墳時代初め、平安時代初めの時期には集落があったことが分かりました。



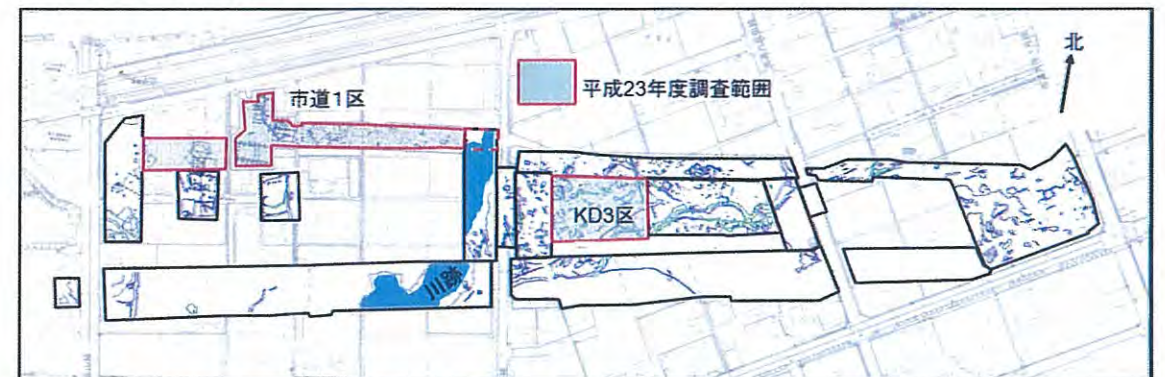
遺跡の位置

北陸新幹線と国道8号糸魚川東バイパスの建設に伴い、平成18年度から本格的な発掘調査を実施しています。6年目の今年度はバイパス建設予定範囲の遺跡中程部分と西側北辺部の延べ4,670㎡を発掘調査しました。

遺跡は上位面で調査区の中程にある川跡を境に古墳時代には東側に集落が、平安時代には西側に集落が営まれました。縄文時代は下位面で中期前葉から中葉の集落が川跡付近につくられますが、その後しばらく洪水土砂が厚く堆積し、中期中葉末に調査区北西部の中位面で再び集落がつくられています。



遺跡土層断面



調査区全体図 S=1/3000 (表示の遺構は古墳時代と平安時代のもの)